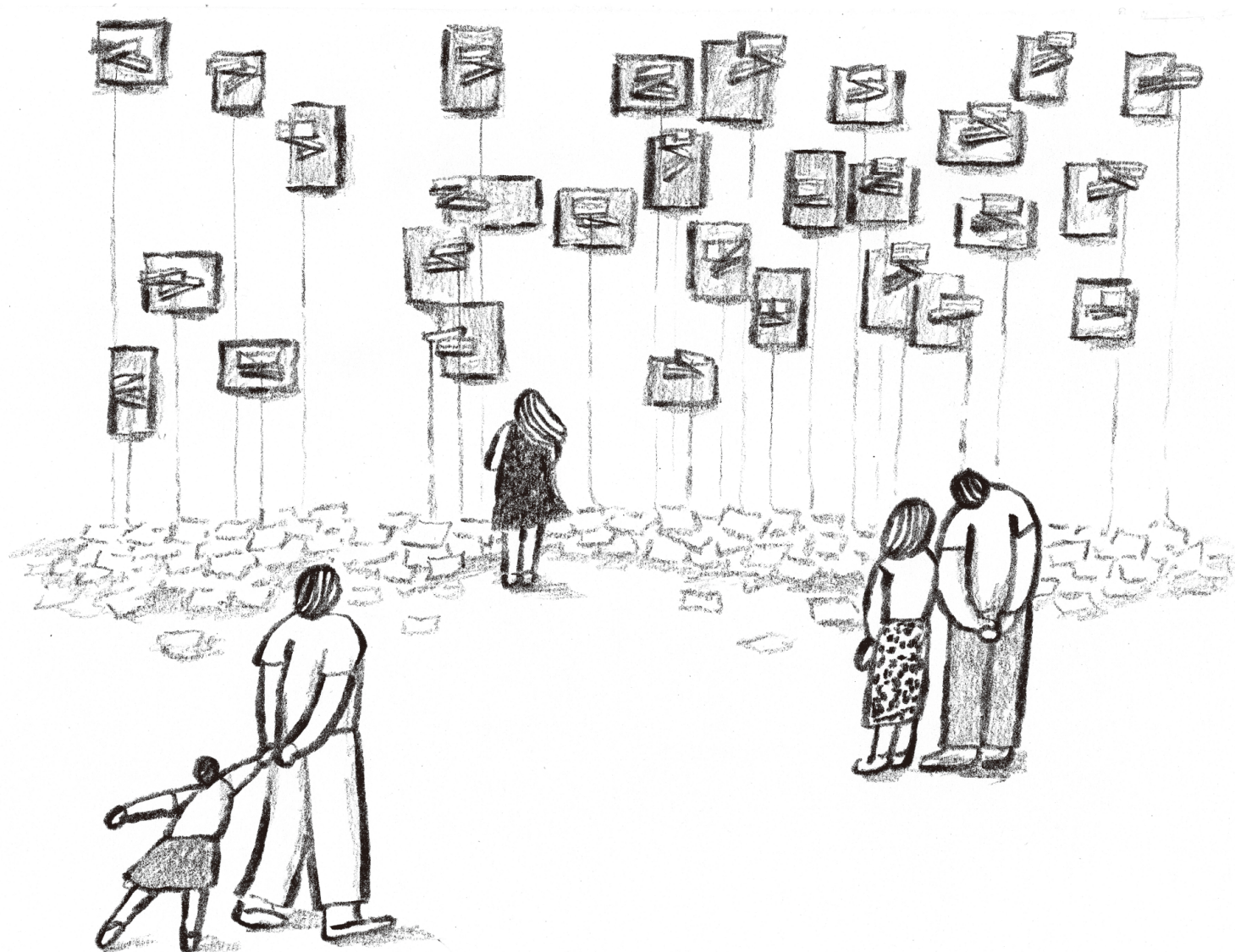


豊田市美術館 オンライン 鑑賞ガイド



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館



久門剛史さん メールインタビュー



久門剛史 Tsuyoshi Hisakado

1981年京都府生まれ。2007年京都市立芸術大学大学院修了。この地域では「あいちトリエンナーレ2016」の豊橋会場・開発ビルでの大規模なイスタレーションが記憶に新しい。7/23からは東京の原美術館で「メルセデス・ベンツ アート・スコープ2018-2020」展に参加、新作を発表する予定。

久門剛史さんに
作品ガイドボランティアからの
質問にこたえていただきました。

Q 豊田市美術館の今回の展示で苦労したところ、あるいは満足しているところはありますか？

満足しているところはありません。しかしいつもそうなのですが、展示が始まって期間が終わるまで、ずっと「もう少しこうすれば良くなるのではないか」と思って過ごしています。ずっと毎日考えています。こだわりと言えば綺麗ですが、往生際が悪いとも言えます。

Q 円周率が繰り返し作品に登場します。作品ガイドボランティアどうしの会話の中では、久門さんの作品のなかで、円周率はこの世の中のいろいろな物事が数値で表せるということ示しているのでは、とか、逆に円周率という割り切れない数字によって人の心といった表しきれないことを示しているのでは、などの意見が出ました。円周率にはどうして関心をもつようになったのでしょうか？

特に円周率に興味をもっているというよりは、始まりがあって終わりが見つかっていないもの、というモチーフとして、素数とか円周率とかがありましたが、円周率が不気味でなんだか素敵だったので、使うようになりました。また、昔から正円の形状に興味を持っていたというのもあります。正円や球体は液体が重力下では自然とそうなるように、形状としておさまりやすい形で、強度



crossfades #1 | 2015/2020年(部分)

的にも力が分散されるという点で信頼できます。絶対的な強さと、これから何にでも変化できるという柔軟さの両方を感じます。

生物的な（精神的な）部分と数字を対照的に見る、ということはあまりありません。自然と人工、という対比で数字と感情を並べたりしているのではなく、僕としては数字も人間が整えた考え方なので、ある種人間味のある素材だと思っています。コンピューターなどの発明で数字が人間からどんどん遠のいていく感覚がありますが、僕はなんとかして数字も人間サイドに取り戻したい、というようなことも考えています。それと、例えば数学で有名な「四色問題」のように数字と美術がたまに会うことがあります。美術は副教科と言われがちですが、こういうとき、メイン教科の数学をお膳立てできたようで少し嬉しいです。ちなみに僕が一番（極端に）苦手な教科は数学と物理です。高校生の最初のテストで数学で7点（100点満点中）を取った記憶が頭から離れません。

Q 作品の色について、白と黒のシンプルな作品が多いようですが、無彩色が多いのはなぜでしょうか？

素材の色が好きです。素材そのままの色には理由があって、一番落ち着いている形です。素材に敬意を払うという意味で、できるだけ素材はそのまま

まの色が良いと思っています。逆に素材に色をつけてしまうと少し乱暴かな、コンロトールしすぎかな、と思います。作品を見ってくれる人々に、頭の中で自由に色付けしてもらえたらと思っています。

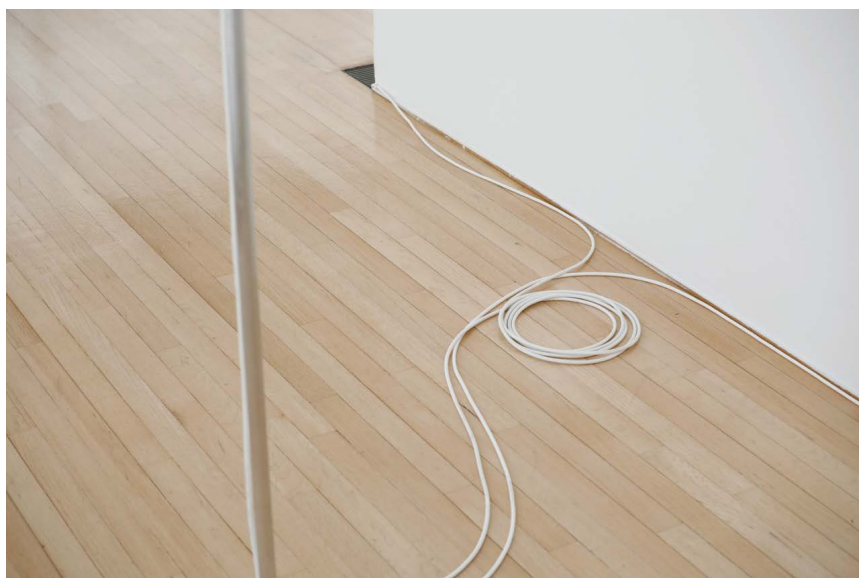
Q 電気ケーブルの存在感が気になっています！生き物に見えてくるし、血管のようにも見えます。あらためて「電気」という存在に気づかせるためですか？それとも電気ケーブルが要素として重要なんでしょうか？

ケーブルが好きだ、というのでは無いのですが。なり、というのでしょうか。「それなり」という言葉の「なり」、なんですが、そうってあたりまえの形、ということです。絵の具でいう、にじみ、でしょうか。

テクニクが付いてくると、たくさんのことがコントロールできるようになってきます。にじみであっても。

ポロックが偶発性を欲したように、までとはいきませんが、ケーブルはいうことを聞いてくれない時があります。また、性格的にキチンとしてしまうので、（豊田市美術館もきちっとした空間なので）そこに柔らかさとか優しさを加える意味で、ケーブルは丸見せにしたりしています。あって当

たり前、そうっていて当たり前、という部分ではできるだけ見せたいと思っています。あとはインフラへの意識があります。政治の構造、流通、デパートのバックヤード…ここに至るまでにどういう仕組みでたどり着いてきたか、というインフラは隠されますが、そのインフラを見ることが、それがとても理にかなっていて美しいことに興味を惹



Pause | 2020年 | 展示風景



丁寧に生きる ーらせんの練習ー | 2020年(部分)

かれます。バイクや自動車のエンジン構造など、町の電線なども美しさを感じたときはハッとします。

Q 時間についてどのようにお考えでしょうか。
時間といえば、流れるとか、永遠というイメージがあり、時刻というと刻まれた一瞬というイメージがあります。「刻む」という字は「彫刻」にも含まれています。久門さんの作品のなかで時間はどのようにとらえられているのでしょうか。

あまり時間ということを特別に考えたことはなく、あくまでも他の要素と並列しています。時計を使ったり音を使ったりして、物理的にも感覚的にも時間につながられてしまうこともありますが、彫刻という考え方も、そこにただ存在している、というだけで、それが朽ちていくという遠く向こうの時間を考えれば、時間の表現だと思いません。博物館などにある昔の木彫の仏像などを見たり、古い寺社仏閣に行くことが好きですが、その文化的、政治的なバックグラウンドよりも、色彩やディテールが朽ちていることに興味を惹かれます。おそらく僕はそういう観点で時間が経つ、ということに興味があるのかと思います。《らせんの練習》という作品も、シャーペンの芯が削れて

いく、という現象自体に、無くなっていく美しさを感じています。作品に時計を使うのは、時間を見せたい、というのではなく、現代でずっと回転していて当たり前の素材、として違和感がないので使用している、ということもあります。

Q 久門さんは学生時代に彫刻を学んだそうですが、いま「自分は彫刻家だ」という認識はお持ちですか？あるいは現在の作家「久門剛史」の中で「彫刻」はどのような意味をもっていますか？

自分は彫刻家だ、という意識は強くは持っていません。しかし、彫刻家、いわゆるアカデミックな彫刻表現で表現しきれぬ作家の方々には敬意を持っています。現代の作家は前代の作家が表現の広がりを持たせてくれた恩恵を受けて、いろんなものを扱ってもオーディエンスが付いてきてくれる環境にいると思います。そういう時代に石や木だけという地球的な素材に向き合う覚悟は今の僕にはありません。

自分の中で彫刻が占める割合は大きいです。彫刻という考え方から多くを学び、救われました。彫刻的な考え方を持つことは、この現代に生きている実感を明白にしてくれるときがあります。

Q 作家活動を始められる前は大手の企業に勤めてみえたそうですが、組織の中でサラリーマンを経験されたことは今の作家活動にどのような影響を与えていますか？回り道をしたとかデメリットは無かったのでしょうか？

これはデメリットなんだと、沢山感じていました。例えば 20代は会社でほとんどの時間を過ごしました。大学を出て同級生たち、同じ年代の人たちが 20代でどんどん美術の分野で活躍していく姿を見ていました。それをデメリットか何かだと思っていました。

結果、それがデメリットでなかったとわかったのは退職して京都に戻ってきて、アーティストを専業としたときでした。知らない人とのやりとりや、制作進行、プレゼンテーションなど、作家活動に活かせるスキルを勉強させてもらえた会社に、とても感謝しています。回り道はないということを、若いときに実感できて幸せでした。大学で学生に接するときがあれば、一度は企業に就職

することを薦めています。

Q 別のインタビュー記事の中で、「美しく勘違いをして、その勘違いを蓄積させて、ちょっとずつ幸せになろうとする感覚が、人間本来が持つクリエイティビティだと思っています」と語っていますが、「美しく勘違いをする」とは具体的にどのようなことでしょうか？

たとえば、月にうさぎがいる、という日本の古いおはなしがあります。実際にはそれは月のクレーターですが、それをうさぎと呼べば、いろんな想像ができます。うさぎは月で餅をついているらしいとか。

日本の伝統的な文化には、ただ自然の風景を見る、借りる、という形式のものが多くだと思います。建築における借景もそういう精神かと思います。

お月見の夜、月を見ながら、かつては我々がたどり着けるはずのなかった場所を好き勝手に想像し、詩を読み、その想像力を互いに確かめ合う文化は、多くの情報で溢れかえり、さらにそれに受動的になっている現代人よりもはるかに、アクティヴに脳の創造の分野にアクセスし、シナプスが活発に繋がっていたと思います。とても豊かなことだと思います。

Q 新型コロナウイルス感染症のため、これまでの日常が日常で無くなった現状から、何か感じたこと、考えたことはありましたか？

コロナウィルスはもともと存在していたということを知りました。新たに現れたのではなく、多くの人類が知らなかった、そして接していなかった。

アメリカで黒人の差別のデモを見ました。我々日本人は、黒人差別を知っているかというのと、それに直面した人はとても少ないと思います。

アイスランドにリサーチに行った時、地球の原型



丁寧に生きる ―具体的な関係― | 2020年(部分)

を見ました。これも知らないことでした。京都に生まれて住宅街で育ち、渋谷区の会社で働きました。とても遠い存在でした。

我々は知らないことばかりです。しかし簡単に「知ったような感覚」になれるツールを開発する能力に長けています。

日常とはなんでしょう。これまでの日常はとても大切です。しかし、それを一切捨て去った場合、空いた心のスペースに何を入れてこれから生きていくべきでしょうか。

おそらく今は、そういう判断に迫られた貴重な機会だと思います。

日本人は東日本大震災の時にも未来への判断に迫られ、変化を託されたと思います。変化した人もいるし、何事もなかったように、元に戻った人もいます。元に戻らざるを得なかった人もいます。

また約10年後、どうなっているのでしょうか。今から学べることを丁寧にすくい上げてみることから始めたいと思っています。

(2020年6月)

